

福山琢磨氏のこと

酒井 董美^{ただよし}

最近の福山琢磨氏

福山琢磨氏といえば、昭和9年5月7日生まれで現在86歳。倉吉市の出身で大阪市にお住まいである。昨年8月までは大阪鳥取県人会の会長だった。㈱新聞印刷、㈱新風書房を経営している。初対面は筆者が鳥取短期大学に勤めていた平成15年3月27日、同大学であった。話してみると氏は大変な経歴をお持ちであることが分かった。昭和24年度1学期、河北中学校3年生時代。『河中科学新聞』を作ったのを佐々木春千代校長が認めて、「学校新聞にしてくれ」と廊下の突き当たりの部屋に、「河北中学新聞社」と校長先生直筆の看板を掛けてくださった。氏は「まさかそんなことになるうとは思いません。驚いたのは自分が大変身を遂げたことでした。それまでは、どこにいいのかすらわからない存在でした。そんな自分が、友達を引き込み、職員室に出入りし、「学校新聞に出す記事はありませんか」と聞いて回ったのです。生徒会の役員にもです」と語っておられる。中学卒業後、ガリ版印刷の経験から活字印刷にあこがれ、大阪で印刷所に就職。植字工・山内幸次郎氏の口利きで夕刊紙である国際新聞社入社、同社の蔡慶播局長から夜学を勧められ、市立扇町第二商業高校に通いながら新聞部入部。二年生のおり高校新聞コンテストで優勝。三年生で編集長、大阪府高校新聞協会を作り事務局長になり、それに専念するため新聞社を辞め、豆腐屋で働きながら加盟校の編集指導をしたが、印刷を希望する高校には国際新聞社を紹介し感謝されたという。これまで例会の会場は加盟校持ち回りだったのを朝日新聞社に一本化し、そこで高校新聞講座を毎年開いて喜ばれた。そして高校新聞コンテストは近畿6府県に拡大していった。

その後、昭和37年。天王寺区小橋町に独自の活版印刷所を開設した。㈱新聞印刷の誕生である。時代は電子化の流れであり、同40年活版から写植に、APR樹脂版を経てオフセット化が実現。同54年7月、社屋を東高津町に移し、出版を業務とする㈱新風書房も作り、『孫たちへの証言』は33集まで発行した。季刊誌『大阪春秋』も出し、自己史講座も開設、現在に至っている。こうして見てくると、氏は鳥取県出身で刻苦勉励の立志伝中の一人と筆者には思われてならない。

氏と親しくなった筆者も松江一中時代、学級新聞『六級タイムス』を毎週のように出し、学校新聞創刊の中心人物となり、松江高校では『松高新聞』、島根大学では『島大新聞』を作っていたので、同じ傾向にある福山氏とは通じるところが大いにあり、今日でもメールを通して交流が続いている。また初対面の翌年8月26日には、氏からの声かけで大阪鳥取県人会で鳥取学前講座として「鳥取の民話とわらべ歌」を話す機会をいただいている。昨年春、健康を害された氏であるが、今後とも健康に留意され、長生きなさることを願う筆者なのである。